

国内諸都市のアーバンデザインへの試み

国吉直行〈企画調整局企画課〉

イタリア、ドイツ等の歴史ある都市に行くと、我々は感動する。写真になり、絵になる光景が多いのである。人々の住む住居群と、そのところどころにポッカーと空いた広場とが、まったく対比として見られる。けっして豪華ではない一戸一戸の建物が、まったく同じような赤い屋根、同じ高さで連なると、ほんのわずかの面積の広場でも、非常に印象的に目に入る。もしそこに、建物群からひとときわ高い市庁舎の塔でもあれば、その広場は絵はがきになり、市民の心のふるさととして一生残るかもしれない。ここには、都市造りに対して、たしかに造形上、デザイン上の意図が働いている。

現在でも、とくにヨーロッパ諸国は、都市計画と同様に、都市空間のデザイン計画に対して相当の配慮がされている。ここでのデザイン理論は、主として、市民の私空間（住宅、商業ビル等）の形態規制のきびしさと、その結果として、その外側に、都市空間として知覚できる道路、広場等を生み出すこと、さらに、公共性の高い建物は逆に個性豊かなものとし、都市空間のランドマークとしての役を担わせるというようなもので、この目的のため、公共施設のデザインは非常に気を使い、また、一般建築に対する形態規制をきびしくして

いる。良い都市空間は、都市生活を楽しくし、また、市民の都市への帰属性を高め、都市の自立性を高めるのではないか。

日本では、江戸期以前は、封建社会を基礎とした都市デザインが相当きめ細かくされ、それなりに都市の個性を作った。明治以降、及び戦後と、欧米の近代都市理論が導入されたが、それは、5千分の1どまりで、それ以下の細かいつめがなく骨格計画だけでデザイン計画まで至っていない。

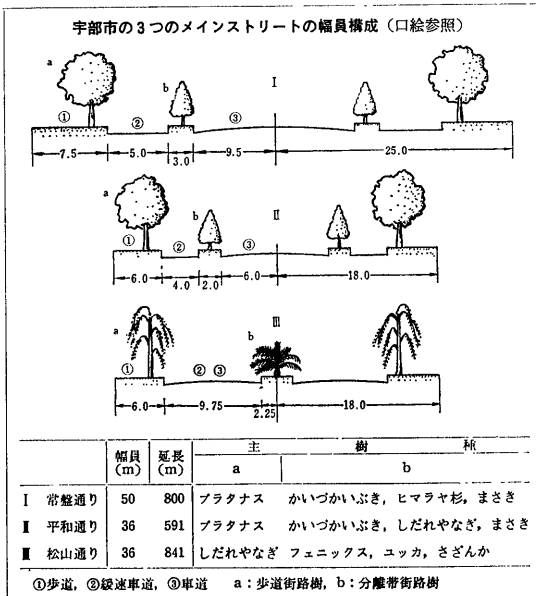
従来の都市空間でも、もういちど手を入れなおし、また建築計画に対する行政指導等をきめ細かく行うことで、かなり楽しく、使いやすく、印象的なものとなる。これからまったく新しく建設するものについてはなおさらである。

ここにあげる例は、必ずしも、すべての面で優れたものではないが、少しずつ試みられている様子の例として紹介する。

図版の出典 〈宇部市緑化事業〉上田芳江・山崎盛司共著「緑で公害から町がよみがえるまで——宇部市緑化20年の記録」カンデラ書館 昭和46年〈宇田川歩道〉「都市住宅」7504 鹿島出版会〈大通り公園とグリーンネットワーク〉「SD」1971—10 鹿島研究所出版会〈新宿遊歩道公園・四季の路〉東京都発行のリーフレット〈神戸彫刻歩道〉神戸市都市計画局・教育委員会のリーフレット「みどりと彫刻のみち——神戸駅前西線」昭和48年9月〈港町くすの木広場〉「新建築」74年9月号 新建築社〈坂出入口土地〉大高建築設計事務所のリーフレット「坂出」〈新宿西口副都心〉マスタープラン＝「建築文化」昭和47年2月号 彰国社 広場＝「建築文化」昭和49年6月号 彰国社〈旭川買物公園〉「建築文化」昭和47年9月号 彰国社〈くずほモール街〉「都市住宅」7504 鹿島出版会〈倉敷アイビースクエア〉「都市住宅」7408 鹿島出版会〈千里ニュータウン〉〈千里以後〉高山英華編「高蔵寺ニュータウン計画」鹿島出版会 昭和42年9月〈竹山団地センターゾーン〉「建築文化」昭和47年12月号

都市緑化計画

●宇部市緑化事業



経緯 炭鉱と工業で、公害都市の代表であった宇部市の、戦後の市民生活の悪化、暴力団の横行などに対する危機意識から生れた市民運動の一部として緑化運動が起こり、これに応じた市当局の地味な積み重ねによる成果である。

企図 「灰じんの町」から「太陽と緑と静けさの町」へ

事業成果 都市公園面積174ha(10.9㎡/市民1人)
街路樹数12,360本

特色は、「宇部スタイル」と呼ばれる街路樹の密度の高い植え方で市の財政負担を軽くする意味からスタートした市営養苗場、現代彫刻展の開催等
事業年度 昭和25年から現在もお続けられている。

所在地 東京都渋谷区代々木八幡～宇田川町

規模 幅5.2m, 長さ0.8km

概要 暗渠上のスペースを利用したものである。巨大なオープンスペースとは異なり、裏路地的鬱陶気をもっており、子供の遊び場等として利用されている。

施設 植栽, ベンチ, 日除け, 砂場, 遊戯施設

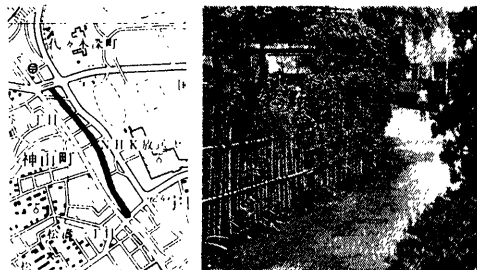
所在地 横浜市

概要 都心部環境改善のため、都心部に混在する工場を埋立地等に移転させ、その跡地にオープンスペースを生みだし、これらオープンスペースと既存の公園とをネットワーク化する都心部計画のネットワークの幹として位置づけられている。

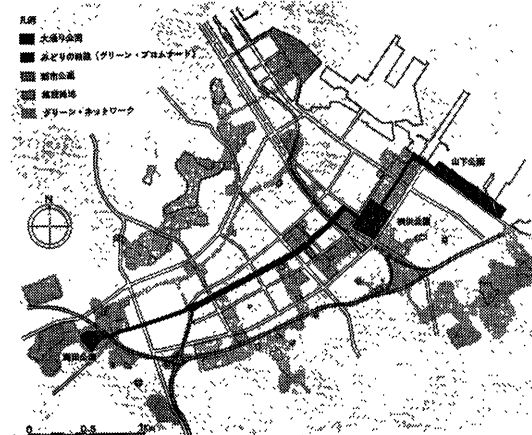
大通り公園の規模 延長1.2km, 平均幅員60m

ゾーニング 石の広場, 水の広場, みどりの森
周辺地区整備計画 大通り公園完成に伴う周辺の高度利用化, 工場の移転促進が, 今後ますます活発化すると思われるが, 今後, 大通り公園周辺の開発行為に対し, 細かい計画の下に行政指導を行なおうとしている。

●宇田川遊歩道

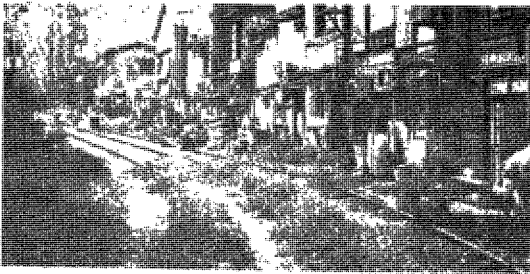


●大通り公園とグリーンネットワーク



都心部の歩行者空間

●新宿遊歩道公園・四季の路



施工前の都電軌道跡↑

↓施工後



所在地 東京都新宿区歌舞伎町～三光町

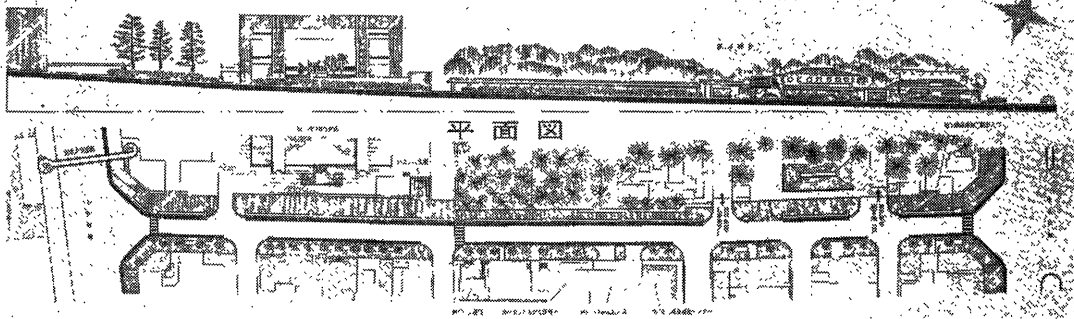
面積 2,311 m^2 (平均幅員8.9 m , 長さ260 m)

事業企画 東京都新宿区役所

事業経緯 ビル、パー街を貫く旧都電専用敷を都心の歩行者専用緑陰空間に変えたもの。

施設内容 植栽, 路面石貼り舗装, 彫刻, 橋, 散水栓, 便所, 水銀灯, 防災用地下貯水槽

断面図



●神戸彫刻歩道

所在地 神戸市

規模 延長400 m , 幅員6.5~11.5 m

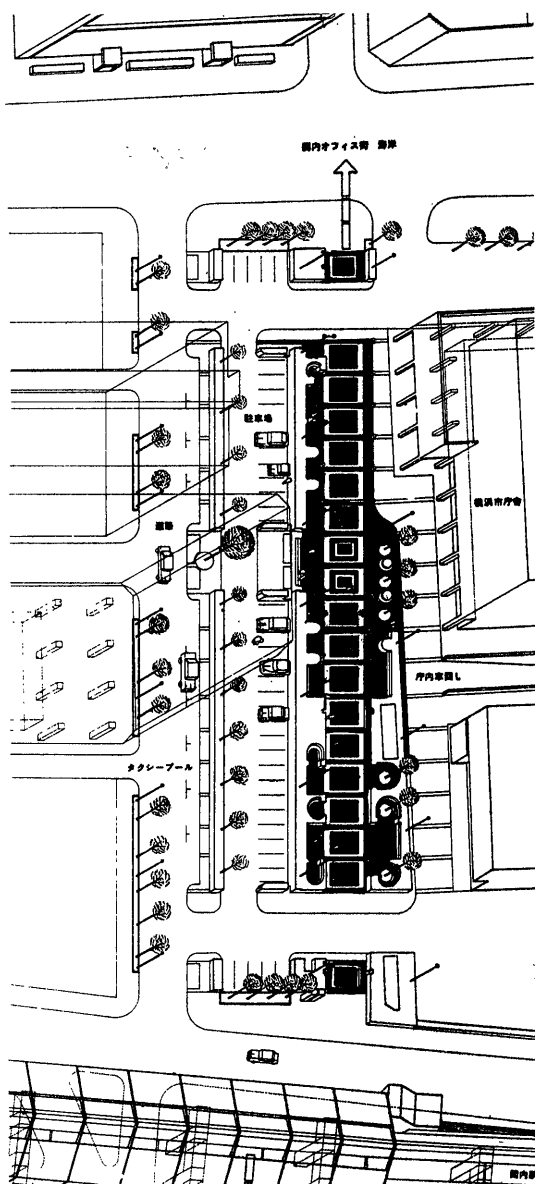
事業主体 神戸市 (都市計画局, 教育委員会)

企図 神戸市, 中心部の文化ゾーンの中の諸施設を結ぶ遊歩道であり, また隔年1回の現代彫刻展の成果を市民に公開展示する場となる。

敷地所管 都市計画道路 (20~25 m) の一部

施設内容 炉器タイル舗装路面, 垂直の壁, 植栽
いこいの広場, 彫刻台+彫刻, 照明

今後 現在市内に8本ある緑道を, 質的に向上させる。



●港町くすのき広場

所在地 横浜市中区

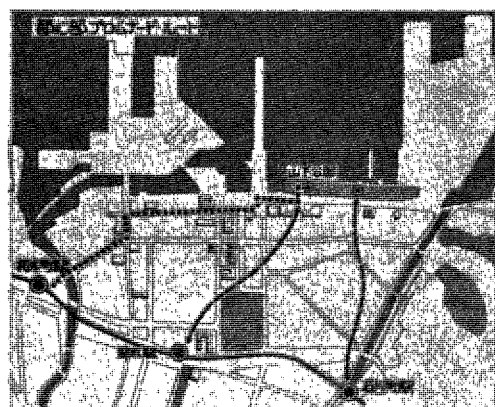
規模 計画敷地全面積 5,780 m^2 ，歩行者専用道および広場 2,650 m^2 （幅員17 m ，延長 123 m ）

事業主体 横浜市道路局，交通局，緑政局

事業経緯 地下鉄工事の原形復旧の機会に，従来の道路と市専用駐車場の配置換えを行ない，歩行者専用空間を生み出したもの。

施設内容 植栽コンクリートボックス+植栽，ベンチ，レンガタイル舗装路面，街灯

●都心部プロムナード



所在地 横浜市中区

計画企図 歴史的施設が多く，またミナトヨコハマとしてのイメージを持つ関内地区の歩行者導線として，従来の歩道を中心に，周辺企業などの前部空間などを，連続的に質的向上をはかる。

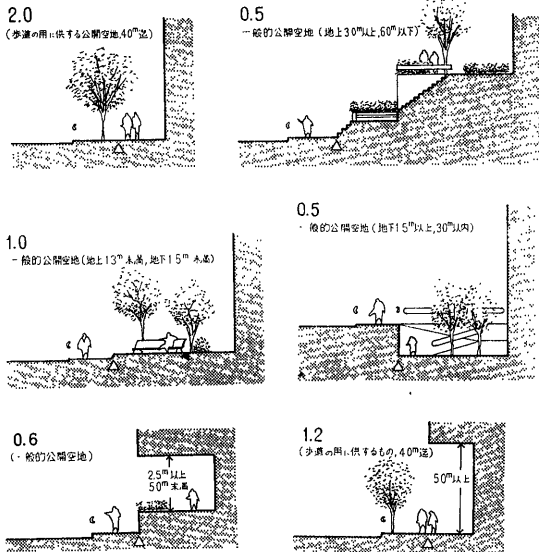
ルート 関内地区主要3駅から山下公園への3ルート

計画内容 歩道路面の舗装等補修，路側植樹帯，広場の部分，絵タイルによる路面マーク，歩行者専用サインポール類

制度

●市街地環境設計制度〈横浜市〉

公開空地の諸割（数字は公開空地の有効係数）



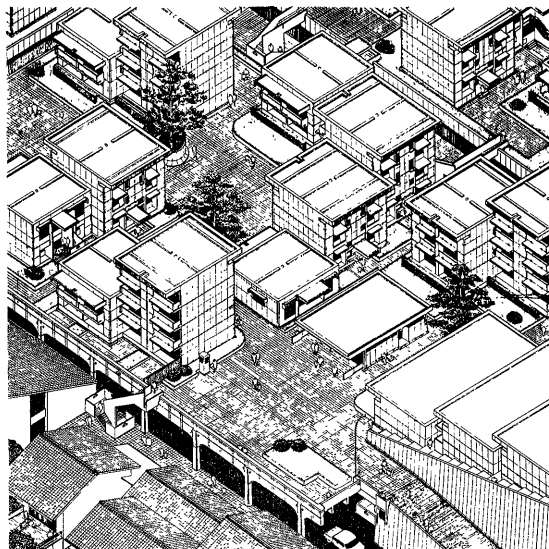
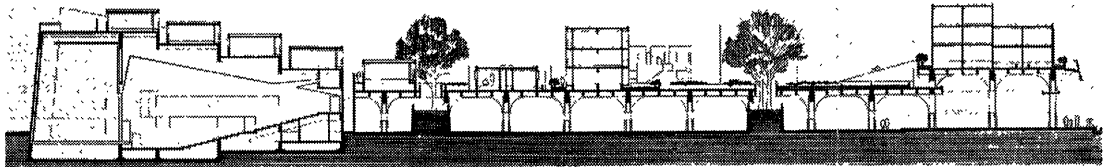
概要 市街地の歩行者空間（歩道、広場）の拡大建築物相互の摩擦（通風、見通し等）の除去や、都市環境の整備向上に努めた建築計画に対し、市で定めた基準によって建築形態制限を緩和する制度である。昭和48年、建築基準法に容積率制が採用された際に、市独自の形で制度化したものである。

緩和内容 容積率制限、斜線制限、高度制限

備考 ヨーロッパ各国では、建築物の集団規制によって、数々の都市形態計画が進められているが日本にはそういった法律がない。したがって、市街地環境設計制度のような建築単体に関する制度をキメ細かく運用することは、ひとつの効果ある方法だと思われる。

地区整備手法

●坂出人工土地



所在地 坂出市

規模 敷地面積12,714 m^2

人工土地面積10,045 m^2

（現在、4期計画で3期まで完成）

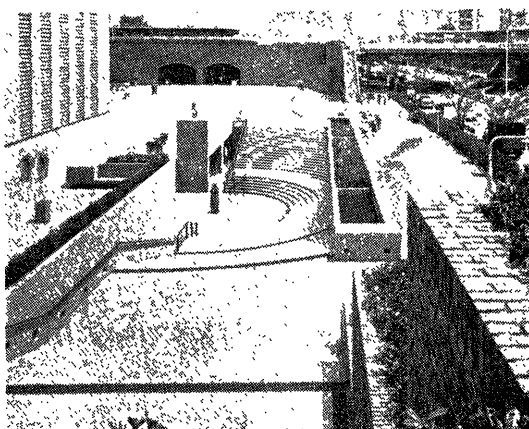
目的 ・不良住宅および商店街混在地区の再開発
・市街地中心部の土地の有効利用・人工土地による土地利用（住+商）の分離

事業手法 住宅地区改良事業と防災建築街区造成事業の合併施行をベースに優秀なデザイン計画がなされている。

影響 坂出をモデルとして住宅地区改法等における人工地盤の補助金が充実しつつある。

●新宿西口副都心開発

マスタープラン



住友ビル前面広場

所在地 東京都新宿区・旧淀橋浄水場跡地

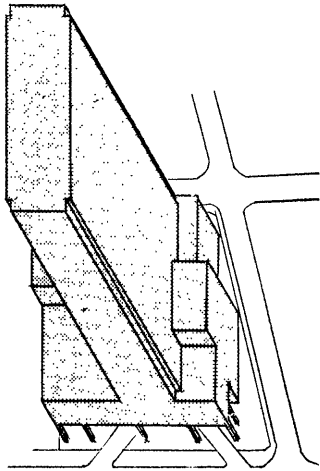
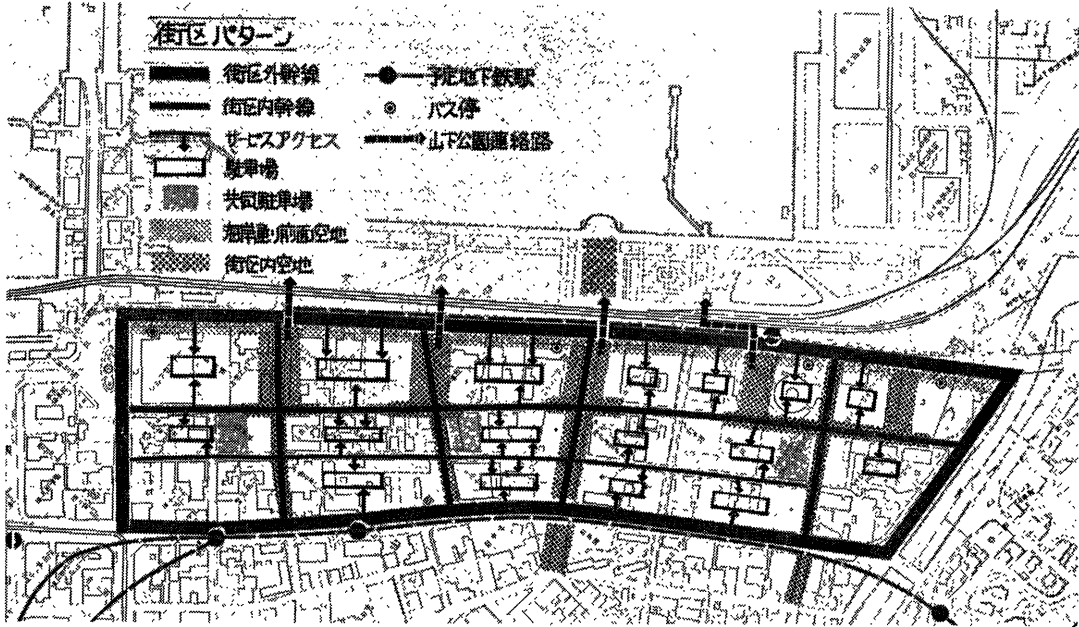
面積 32ha (11区画)

開発規定の経緯 ①東京都水道局から各街区売却時の契約条件内の内容、②街区を所有する各社で構成する新都心開発協議会で決められた建築等に関する自主協定の内容

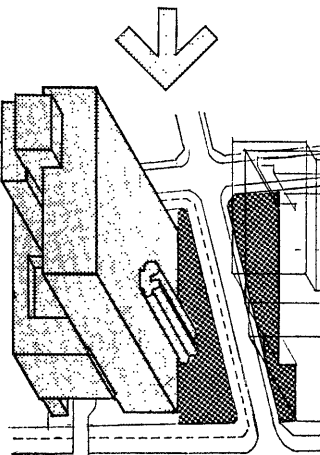
主な規定内容 ・街区の分割利用禁止・用途の制限・公共駐車場の設置義務・建築面積率、空地率・空地の利用規定(広場化)・最低容積率・最高高度・歩道橋、歩行者デッキ、歩行者通路等による各街区の連結義務、及び各寸法・壁面後退線・斜線制限

評 建築協定等の規定を作り、規定に沿って進められた点で一応の成果はある。しかし、規定内容だけではキメが荒く、現実には、各建物間の連帯性が低く、街としての一体感に欠ける。この点をカバーするには、もう少し細かくチェックする指導組織が必要だと思われる。

●山下公園周辺地区整備計画



45年10月案
 容積率—90.3%
 高度—75 m
 建ぺい率—83.7%
 駐車台数—40台



48年10月案
 容積率—65.2%
 高度—45 m
 建ぺい率—63.2%
 駐車台数—69台

所在地 横浜市

規模 地区面積：約15ha

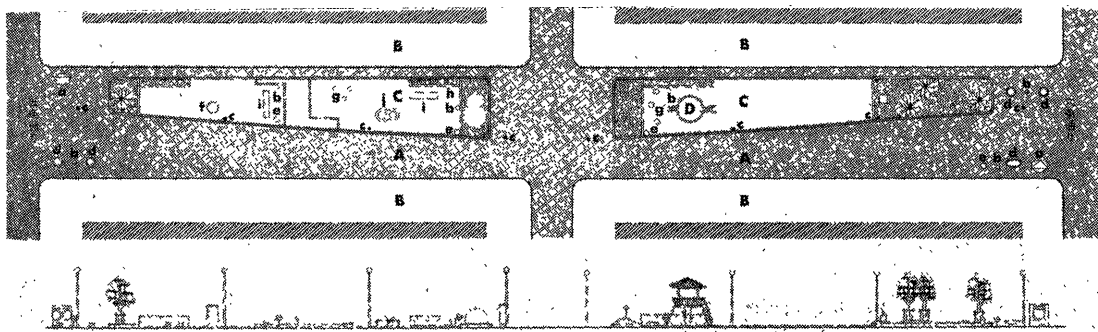
目的 横浜市を代表する地区として、用途、建築形態などについてキメの細かい行政指導を行い、地区としてのまとまり、歩行者空間の拡大、整備を行う。

事業手法 現在は、市街地環境設計制度を中心に建築許可、確認業務の際の行政指導により行っている。今後、要綱化するかどうか検討中。

主な計画内容 ブロック別用途、壁面後退、歩行者広場、車の導線の整備

商業施設整備と街路整備

●旭川市買物公園



所在地 旭川市

規模 幅員20m, 長さ1,087m

商店街再開発区域(買物公園両側)約250万 m^2

計画企図 旭川市の中央縦貫の商店街の再興のため歩行者の憩う場を設け、車をシャット・アウトすることにより、新しい街づくりの方向とする。

経緯 商店街と市の長期にわたる検討、実験の結果、国道から車を締め出し公園化するところまできた。今後、来街者の増えた商店街の建物、ペDESTリアンデッキ等の整備計画が進められている

施設内容 ブロックに別れた変形プラザに施設を配している。

植栽, 彫刻, 噴水, 時計, 照明, ベンチ, くずかご, フラワーポット, 水のみ, 山小屋, パラソル, ニュース塔, 展示施設

所在地 大阪府枚方市(京阪電鉄くずは駅前)

規模 総面積 85,700 m^2 , 駅前広場 10,100 m^2 店舗等 36,800 m^2 , 駐車場 37,964 m^2

形態等概要 大規模なニュータウン計画の核としてのショッピングセンターとして計画された。百貨店, スーパーストア, 70以上の専門店を放射状に広がる屋内, 屋外に渡るモールの周囲に配置したもので, 中央に広場がある。

施設内容 植栽, オブジェ(蒸気機関車), 噴水, 照明, 水のみ

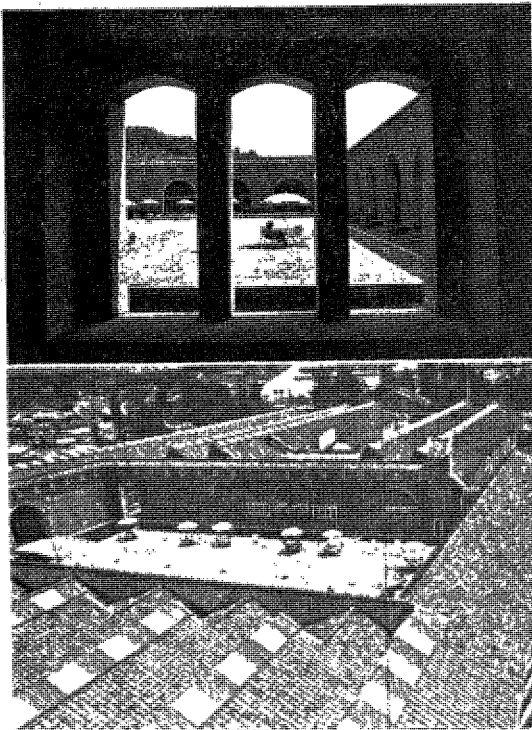
●くずはモール街



保存・再生

どの都市も、数百年の歴史を経て今日に至っており、過去の歴史が、その都市の今後に重大な意味を持つ。例えば、港町として出発し、発展した横浜は、将来も港都としての性格を持ち続けるであろうし、もし、これを断ち切る場合は、都市として大きな障害に出会う。このような面は、市民の

●倉敷アイビスクエア



生活と都市の施設、景観などの関係でも同じである。こういった点から、日々成長して行く都市の中で、歴史的、景観的な面等から重要な施設、都市空間を保存、あるいは新しい機能を付加して生き返らせる（再生）ことも、都市にとって重要な課題である。

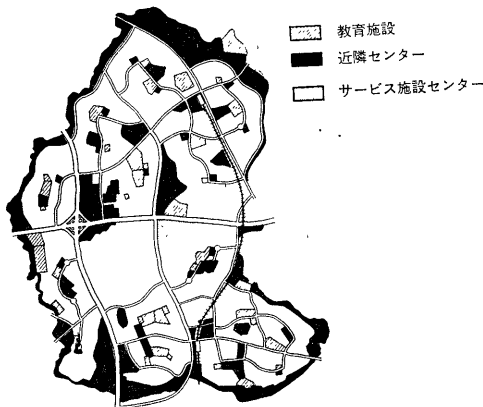
所在地 方法 倉敷市レンガ造工場建物保存および機能変換による再生

概要 特色ある街並みを持つ倉敷市の「歴史に景観両面において重要な旧紡績工場跡の建物の一部を取壊し、そこに広場を設け、残った建物に新しいデザインを加味し、旅行者の宿泊施設とした。

再生後の旧紡績工場

ニュータウン

●千里ニュータウン



所在地 大阪府豊中市・吹田市

面積 1,160ha

人口 15万人（住戸37,330戸）

事業主体 大阪府企業局

開発手法 団地住宅経営および新住宅市街地開発法

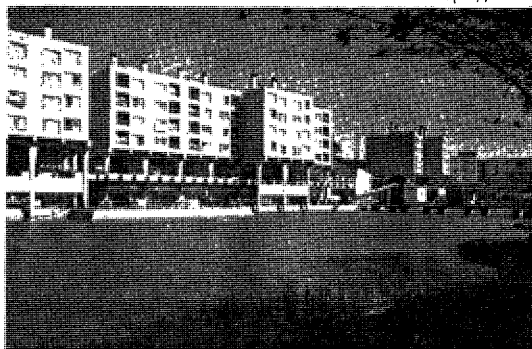
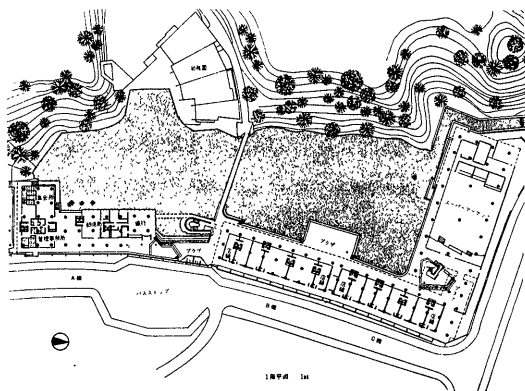
計画 段階構成理論によるコミュニティ・プランニングがなされ、三つの住区の下に、近隣分区、さらに細かい隣保区を設定し、各単位毎の施設配置を適正に行おうとした。

●千里以後



都市軸とペデストリアンデッキシステム（高蔵寺）

●竹山団地センターゾーン



評 大規模住宅都市として、欧米の住宅都市を参考にして、高密度な都市生活を実際に出現させ、後発のニュータウンに多くの示唆を与えている。

●空間の単調さを避けるため、住棟の形態（高さ構成、ポイント型の配置等）ペデストリアンデッキ緑道、ショッピング広場など多くの工夫が、その後のニュータウンで考えられている。

高蔵寺：ペデストリアンネットワーク

泉北：緑道（歩車分離）

所在地 横浜市緑区

事業主体 神奈川県住宅供給公社

規模 敷地面積 8,045 m^2 （池：7,000 m^2 ）

建築面積 4,650 m^2

施設 屋内部分〈1階〉店舗、銀行、郵便局、集会所、ショッピングプロムナード〈2階〉ピロティ、駐車場、パーラー〈3～6階〉住宅
屋外部分：池、橋、広場、階段、斜面緑地

評 機能的な施設配置が主だったこれまでの住宅団地に比較し多くの点で優れている。

1. 人工の池と、その周囲のランドスケープデザインがなされている。
2. 建物の形態について、フレキシビリティがある。
3. 店舗の配置が密でなく、歩行者の行動空間が広い。

この結果、同一色の住棟群の中で、相当有効な視覚上、行動上のシンボル地区となっている。